

# カフカの『村医者』における象徴化された世界と現実

## DIE SYMBOLISIERTE WELT UND REALITÄT IN KAFKAS "EIN LANDARZT"

博士後期課程 独文学専攻55入学

小 谷 哲 夫

TETSUO KOTANI

カフカの世界が《象徴化された世界》であるということは疑問を挟む余地もない事実である。しかし、古典的象徴と比較すれば、それがひとつの明確に、いや少なくとも或る程度洞察可能な事物を対象としているのに対し、カフカの象徴にはそのことが云えない。彼の象徴の特徴は正にその多義性にある。従って、全く異なる方向で、即ち神学的、哲学的、社会学的、心理学的等々の立場で、その象徴の解釈が、云わば無限定的になされてきた。しかも、それらの解釈は不可思議にもそれぞれの立場で正当化されるように思われる。象徴化されたひとつひとつの形象を取り上げ、それらにそれぞれの立場を見い出そうとする。それは個々においては一見納得させるに足るようではあるが、全体的には欺瞞的な印象を残し、そうした種々の解釈に払われた努力が結果的には徒労とも虚無とも思われる感を脱し得ない。それは文学外のそうした色々の領域から象徴を分析しようとしたことにその印象を免れない原因の一端があるように思える。従って、この論文では、カフカの実生活における体験が、象徴に関して『判決』程彼の現実問題との対決が透けてみえないが、しかし後の作品程その密度を濃くしていない過渡期的作品『村医者』において、どのように織り込まれているかを論考することを主眼とする。その体験とは《作家であるがために》という根本的な立場から派生する様々な葛藤であると要約出来よう。そして、それがいかなる形象を借りて象徴され、カフカの描く世界の底辺を構築しているかを見る。

カフカの用いる言葉は極めて日常的なものである。しかし、それとは逆に、そのひとつひとつを持って構成された世界全体は全く夢想的或はメルヘン的な性格を帯びている。もちろん、メルヘン的と云っても種々の物語の結末で見られる如く調和的幸福的に終わっていない以上、通例の意味は当て嵌らない。ヤノーホとの対話で云っているように、《血塗られぬメルヘンはなく、全てのメルヘンは血と不安の深みから来る》のだ。人を震撼させるこの陳述を理解するためには、まず原点として彼のメルヘンを生んだ土壌としてカフカの実生活の状況を念頭に置いて作品の分析を試みなければならぬ。こうした現実との接点を探求することの意義は、新鮮な進歩的な解釈を得られないまでも、大きいと確信する。つまり今までの解釈は、カフカの実生活との接点を余り考慮することなく、彼の世界を既に既成の世界と見做し、その中で前述のような種々様々な立場で論を展開してきた訳で、どんな

作品でも分析するに当たり、本来まず第一に問題とすべきそうした接点を無視してきたのであるから。もちろん、後の諸作品に見られるように、彼の世界は次第に一義的な解釈を拒むようになる透視出来ない迷路的な世界に完全に変貌して、この既に出来上がった一分の隙もない世界にそうした接点を見出す余地が全く削除されているという事実を一片たりとも否定する気はない。だが、象徴と比喻によって普遍化されたその世界とて個人的な体験を基盤としていることは疑い得ず、仮令そうした体験が立証出来る明確な形で反映されていなくとも、分析姿勢として念頭に置かなくてはならぬ問題である。そうした姿勢を保持して論ずる H. Binder の論文『獵師グラックス』は一読に値するものであろう。その分析方法は決して新しいものではないが、ことカフカに関しては等閑りにされてきた。この作品にはカフカの世界には珍しくイタリアのガルダ湖畔のリヴァという実在の地名が挙げられている。彼はカフカが二度この地を訪ねたことを根拠とし、この論文内でこの町の地勢を極めて詳細に渡って調べ、そこでの伝説を含め、この作品の世界をどのように構築しているかを論じている（成る程現実との関連を余りにも細部に渡って論じており、逆に強引とも思える解釈に多少抵抗も感じるが）。とにかくカフカの世界の根本的な構成素材として、仮令それがいかに接近を拒む世界であろうとも、どのように彼自身の現実が係っているかを凝視し論考する姿勢を崩してはならない。

『村医者』は『天井桟敷にて』『隣り村』『炭坑訪問』『兄弟殺し』『11人の息子』『家長の心配』等13篇と共にそれらの表題物語として1919年 Kurt Wolff 出版社から出版された。これらの物語の明確な成立順序は定かではないが、主要なものは1916、7年に出来上がり、一部は1917、8年に公にされている。このカフカ自らによって公にされた『村医者』に対する彼自身による評価は、この作品が他の13篇の物語を含む『村医者集』と表題名とされている点並びに1917年9月25日の日記の記述から推察出来る；＜一時的な満足は僕は自分にまだこのような作品が出来ると仮定して（非常にありそうにもないことだが）、『村医者』のような仕事からまだ得ることが出来る。しかし幸福とは、僕が世界を純粹なもの、真実なもの、不変的なものへ高めることが出来る場合にのみ得られるのだ＞。この記述とヤノーホとの対話を比較してみる；＜文芸は事物を快い好ましい光の中へ置こうと骨を折る。しかし詩人は事物を真理、純粹、永続の領域へ高めることを強いられている。文芸は快適を求める。詩人はしかし幸福を求める者だ、そしてそのことは全く以って快適なこととは云えない（S.84）＞。この二つの陳述からカフカ自身のこの作品に対する評価と製作の難しさが窺い知れる。この難しさとは一体何か？ それは、カフカが個人的体験を極力抹消し、その描写しようとする世界を完全な比喩的世界に純化、普遍化し、本質的なものへ圧縮しようとする試みである。従ってそこにはもはやこの作家の伝記的或は体験的関連を明確な形で見出すことが困難となり、あのヘルメーティシュな世界へ通じてゆくことになる。しかしながら、その世界へ通ずる段階としてのこの作品『村医者』にはまだそうした現実面との関連を垣間見させる余地が残っている。例えば、そのひとつに、長編小説の人格或は人間性を持たない登場人物と比較すれば、叔父 Siegfried Löwy が原型とされているのではないかというのを挙げても差し支えあるまい。またしばしば研究対象として取り上げられる『傷』の問題も実

生活との接点として挙げられよう。他の個所には見られない詳細な描写をもつこの《傷》が罰を含めた含蓄ある象徴であることは否定出来ない。この作品と同じ時期に認められた肺結核をカフカが実生活においてむしろ歓迎したという事実、それはもちろん作家並びに市民的存在、結婚問題等を含めた現実からの自己解放を意味したからであり、病気そのものを《鎮痛剤》と見做す彼にとって《傷》をひとつの象徴として表現しようとする傾向は理解出来る。作家的生活と市民的生活の相剋において、結局作家であることを持って生まれた天職と自覚し、それが故に破滅を定めと知る彼が、生まれながらにして持つ傷のために死ぬ少年に、自分の宿命的な似姿を貸与したことは容易に推測出来る。作家である、いやそうあろうとするが故に、市民的生活から見れば、また彼の一家、特に父親や或は許嫁フェリーツェの立場からすれば、明らかにその存在は罪であり、破滅或は死が当然の罰である、そのことをさらにそうした対立者よりも彼自身最も良く認識していた。罰のテーマは『判決』における作家存在と市民存在が背景に織り込まれた父子の葛藤以来、カフカが描写しようと追求するひとつの対象であり、その反映をもこの作品から読み取ることが出来る。もちろん、罪と罰の問題は『判決』『流刑地にて』『審判』等の作品程明確な形で表現されているわけではない。それは、後に象徴化の問題で触れるが、それらの作品を始点としてこの罪或は罰が明確に把握出来る形象を取らずに象徴の度を増していく過程を洞察させるようにも思える。こうしたカフカの実生活との接点をこの作品に見出すことはまだ可能であるが、このことを象徴密度が濃厚となって到達する後の完全なヘルメーティッシュな世界に比較して P. U. Beicken は次のように云っている；<『村医者』という表題物語は、確かにまだ以前の、個人的に条件付けられた状況の名残りを、即ち家庭内の闘争状況を応用しているが、象徴密度に関して比喩的反映が欠けてはいないものの、まだその反映の密度をもっていない。この意味において、カフカが明らかにより大きな《幸福》を感じた比喩的な他の諸作品から『村医者』の表現傾向は区別される…>。このようにカフカの実生活における体験が底辺を形成しており、冒頭で述べた通りそのことを大前提として論じていくが、この底辺を基盤とし、その上で彼の世界はその固有な複雑な要素によって、例えば、前述のような神学的、哲学的、社会学的、心理学的等々の切片が絡み合って構成されており、そうした諸要素が不可思議な均衡を保って表面を覆い、個人的体験を大幅に抹消し、全体として彼独特の普遍的な深淵な世界が描き出されている。実際そうした種々の立場での論文が提出されており、例の実生活での体験を隠蔽し象徴する技法にいかなる係りを持つかを問う上で、主要なものを要約する必要がある。

例えば B. Goldstein は『村医者』に見られる不可思議さ、神秘さをカフカが精通していたと思われる Hasidism に関連して論考している。彼の日記や手紙、ヤノーホとの対話の端々に見受けられるユダヤ人の生活と伝統の種々の視点、それとの彼自身の闘争、さらにまた彼所有の蔵書内容からユダヤ神秘主義の形式である Hasidism との関連が認識出来るという。Hasidism とは神によって創造された万物も神秘的な或は超自然的な力を潜在的に有している、しかしその力を利用する能力と機会を持っているのは他ならぬ人間であって、それを自己並びに他者のために使うことが人間の使命であると信奉する。そのことにより人間は世俗的なものと神聖なものとの距離を克服するという。この超自然

的な力に代理される精神的世界は、日常の経験的世界で通用する概念も法則も通用せず、不合理に働く。それは、例えば絶望状態にいたときの馬の出現、患者の家へ達するまでの物理的な空間的・時間的隔りの克服等の描写に見られ、馬に関して形容される《unbeherrschbar》或は《unirdisch》の言葉そのままである。この精神的世界の超自然的な力は、《突然の馬の出現》に比喻されるように、日常の経験的な世界の中に隠され、認められずにある。その二つの世界を統合するのが人間の使命であるのに、村医者はその機会を逸し失敗する。即ち患者に対し無私になって献身することなく、なすがままにさせることに甘んじ、最終的には自分を救うために自らその場を立ち去ることにより、例の力に連関する能力と機会を放棄する。この患者を救うということは不可能なことかもしれない、しかし Hasidism の根本的思想である、自分自身の生のためばかりでなく、他者のためにも自分自身の形而下の存在を超越しようとする試みの中に人間の生の意味と人類の重要な点があるのであり、他者を治療することで彼自身も治療され、他者を救うことで彼自身の狭い限界を超越し、彼自身も救われることになる。だがその努力を村医者はせずに、自分自身を守るために少年のもとを去ることで、《unirdische Pferde》ももはや超自然的な力を発揮しなくなり、荒涼とした絶望的な世界を彷徨しなくてはならなくなる。人間失格者としての烙印はローザを失うことによって擦られる。Hasidism は反禁欲的立場を取っており、性的肉体的愛は、完全な人間であるなら、当然享受しなければならない生の面であるとする。従って村医者の立場は彼女の喪失により肉体的領域においても精神的領域同様に欠陥者であることを証する。そのことの洞察を誰れよりも彼自身がするようだ。それはローザを暗示する《バラ》と形容される傷の中にもう一度象徴されている。このように B. Goldstein は論じるが、この作品が Hasidism の思想を基調に、逆に人間としての本分を怠った失敗者を表現しているという分析には同調出来ない。この作品にそうした客観的描写を見るよりも、再三言及してきたように、カフカ自身の問題、闘争、生活状況等の体験を見る方が妥当であり、その表現技法として Hasidism との関連を論ずるこの論文を見直すなら、その価値はあるように思える。従って Hasidism の根本思想は理論的よりも神秘的に方向付けられているため、その神学のみならずその宗教上の体験を描写するために、象徴と隠喩が用いられている、と指摘される点をもっと留意する必要があるだろう。実際カフカの蔵書中にはラビが空間的・時間的隔りを克服して目的を成就する内容の Hasidic 物語がある。村医者が、ラビのように成功者ではないものの、その物理的隔りを克服する描写は類似している。また個人的体験を極力抹消し普遍的世界を描写しようとするカフカの意図を考え合わせれば、傷の位置にも意識的な配慮が見られる、即ち旧約聖書のヤコブの傷を想起させたり、彼の蔵書にある聖書の原文に基づく多くの物語や伝説の中には、ヨブのはれ物の、蛆虫からして非常に類似した描写がある。自分の現実状況をオーバーラップするためにそうした描写の借用は容易に推測出来るよう。

以上のようなひとつのエダヤ神秘主義との接点からの論述と同時に心理学的な連関からも、即ちカフカのフロイトに対する関心の文学的表現として『村医者』を論じた立場もある。事実『判決』に関してはカフカ自ら《フロイトを考えている》（1912年9月23日付日記）と語っており、『判決』と『夢判断』における立場の逆転した父子関係の場面並びに息子の婚約に対する父親の反応の内容は酷似し

ていて、『判決』にその応用が見られる。『判決』以後しばらく間隔を置いたが、再びフロイト、心理学或は精神分析学に関心を持ち始めたことが、第3のノートの1917年10月19日に記されている。だが、そこでは内面世界の観察不可能性が語られ、内面世界は記述可能と主張する記述心理学に対して批判的な立場が取られており、この立場が著述時期をほぼ同じにする『村医者』の中に見られると E. Marson と K. Leopold の協同論文は云っている。この論文の賛否は後に譲ることにして、その内容を要約しよう。

内容からして少年のもつ《傷》が身体的なものではなく、むしろ精神的なものであるということは容易に推測出来る。従って従来の伝統的な医学方法によって治療される性質のものではなく、そこにフロイトとの連関が引き出せるという。即ち彼が自分を実験台として自身の潜在意識を探究する過程で精神分析学の創始の義務を感じたことが、それは潜在意識を象徴する《使われていない豚小屋》を蹴飛ばすことに表現されている。その結果生じた馬と馬丁は、前者が従来の医学方法では患者に接近出来なかったが、それを可能にしたフロイトによる新しい心理学上の力を、後者が潜在意識中の制し難い肉欲的本能的力を象徴する。またローザは医者<sup>1</sup>の精神を象徴し、今まで無視されてきたが、この新しい学問によって人間の病気を治療する上で新たに取り上げなければならない対象となったことが暗示されている。それと同時にこの学問の新しい心理学上の力がローザ、即ち医者の精神、換言すればフロイトが自分を実験台として使用し、自己暴露によって解放されたことも暗示されている。しかし、そのことによって逆に、フロイトは精神に対する伝統的な概念、神聖な犯すべからざるものとしての見解を破壊した、つまり精神は分解、分析され、潜在的な底辺が暴露され、無慈悲に描写されることになった。新しい心理学上の力を用いよという《馬のいななき》に喚起されて、不承不承ながらも、その力を使う決心をする。そして《傷》が発見される。前述のように、この傷が少年の精神であることは、形容詞《rosa》を使い、女中ローザとオーバーラップされることにより、その確証が得られる。また《蛆虫》は潜在的に抑制された、病因となる何んらかの体験が意識に現われたことを示している。だが最初はこの傷、即ち病んだ精神は宗教的に対処されるべきだと見做される。医者がベッドに寝かされることにも大きな意味が潜む。服を脱がすということはフロイトが今まで何んの基盤もなかった土壤に新しい学問を展開する上で自己を実験台とし暴露しなければならなかったことを示し、ベッドに寝かされることはベッドが患者の夢を、即ち精神分析による治療法の中心的要因を意味し、従ってこの方法による治療者は普通の医学的臨床以上に詳細なレベルで患者に接しなければならないことを暗示する。しかし、その治療にも拘らず、少年は死ぬ、このことはこの新しい精神分析の治療法が患者に対して僅かな慰めを与えることが出来たかもしれぬが、結局は病気を治療することは出来なかったという象徴に他ならない。そして雪の荒野をさまよい、破滅する様は、従来の治療法によってもこの新しい方法によっても結局患者を救えなかったこと、フロイトにしてもこの学問を展開する上で余りにも自己を暴露した今、もはや以前の精神的状態に戻ることは出来ないことを表現している。最終的に精神分析学は人類の病いを治すことが出来なかったという批判となる。このように二人の協同論文は第3のノートの記述を始点に論述しており、一見納得させるに十分な象徴分析を行って

いる印象を受ける。しかし果してこの作品をそうした外部の世界の翻訳と片付けて良いものだろうか？ この作品に限らず、そもそもカフカが求める描写対象はそうした外部世界だと云えるのだろうか？ いや、他の諸作品からも推測出来るように、またこの論文の大前提として冒頭で述べた通り、カフカの描き出そうとする対象或は世界はもっと本質的に彼の内面に係る問題で、その吐き出しと見做すべきだろう。従って E. Marson と K. Leopold の協同論文もやはり本質的な問題を無視し一面的な分析に終わっているようだ。しかし、前述の Hasidism の側面からの論文に関して言及したのと同様に、『村医者』に用いられている描写形式並びに技法を見れば、『夢判断』の理論の応用が認められ、この点が指摘されていることにより大きな注意を払うべきだろう。『夢判断』の理論に条件付けられているとは、そこでは夢の潜在的な内容を理解し把握することが目的であるが、『村医者』が夢の形式で描写されているという観点からくる。例えば、しばしば問題とされる医者と患者とを隔てている時間的空間的距離は、前述の Hasidic 物語に見られる類似描写とは別に、潜在的な内容になれば、夢の内容の中でも欠けていることとなり、決して物理的意味あいのものではない。従って医者が一瞬にして患者のもとに到達することは、そこまで達する距離が問題なのではなく、患者を診察することが重要な潜在的な内容であるため、何んら不合理なことではなくなる。夢は一種の凝縮装置であり簡潔なものである。また夢の潜在的な内容は明白なレベルで象徴の形で表現されるということもこの物語に用いられた形式と技法に一致する。物理的問題のみならず、夢の中で感じられた感情は潜在的な内容に属するため、傷とその内容は本来なら不快な吐き気を催させる性質のものであるにも拘らず、潜在的な内容では患者の精神であり、その病いであるが故に医者に不快感を起こさせないのも別に不合理なことではない。さらに夢の中では因果関係も必ずしも成立しないという点、また夢見ている者が妨げられて目覚める場合があるとすると、夢はしばしば感情をその反対の感情に移すという点、従って医者が服を脱がされたにも拘らず、《全く落ち着いて皆より優っている》と感ずることも不自然ではなくなる。さらにこの作品内の時制の変化も同じ夢の中で起こり得る直接性と鮮明さの変化するレベルに一致するという点。こうした数々の点はフロイトの『夢判断』の理論における諸法則と相通じており、表現に極めて細心の注意を払うカフカにしてみれば、その『村医者』の描写形式と技法において、内容的に一見不合理に思える描写も本質的なものを描写する上で何んら不自然なことではないと確信し、余計な副次的描写を極力排除しようとする彼の意図からしても、その応用を語ることは脱線した指摘ではあるまい。

上に特に取り上げた二つの論文が論述し主張するように、この作品の世界がそうした外部世界を対象としているということには、即ちこの作品に Hasidism の根本思想から見た失敗者としての村医者或はフロイトの精神分析学、特に『夢判断』の理論に対する批判とパロディーを見たりすることには同調しかねるが、その描写方法においてかなりの類似点、応用点があることは否定出来ない。八つ折り判ノートや日記やヤノーホとの対話の記述等から窺い知れるように、実際実生活においてカフカのフロイトや心理学への関心、或は蔵書内容からのユダヤ神秘主義との接点は容易に見い出せる。また『父への手紙』にはユダヤ教についての彼の見解も明確に語られている。従ってカフカが自分の世界

を描写する上で、そうした種々の要素を融合させて構成していると考えても的を外してはいまい。もちろん、上に要約した二つの立場だけが構成要素だと主張する気は毛頭ない。カフカ固有の世界がもつ含蓄ある深淵さは、仮令そうした種々の要素が色々な土壌から借用され構成に用いられているとしても、描写する上でカフカがそれらを完全に消化しきっているということから来る。だから、この『村医者』に限ることではないが、それらの要素はもはや得られた土壌の痕跡は残さず、彼の描く世界の中で新しい生命を得て有機的に作用するようになる。それは、この作品ひとつ取り上げても、前述の二つの論文のように全く異なる方向で解釈可能であるという点にも窺い知れるかもしれない。だが、今まで主張してきたように、彼の描く世界は彼自身の内面問題、体験等を並列に置いて考察すべきである。《傷》、《一家の状況》、成就出来ぬ《救い》等に象徴されるものは、あくまでもカフカ自身が置けている逃れられない不安の意識、葛藤を根底としていることを念頭に置かななくてはならない。そして、そうした個人的体験を抹消して普遍的な描写する上で、様々な素材を投入していると考えべきである。従って、その手段を見る上で上述の二つの論文を取り上げたのであって、冒頭で述べた大前提に矛盾するような、文学外の領域から解釈したりするものではない。しかし、再三言及してきたように、この『村医者』の描写形式と技法に留意すれば、実生活においてカフカが関心を抱いていた Hasidic 物語の二つからの酷似したモチーフの応用と『夢判断』の法則の応用を見て取ることが出来るのである。

このように見れば、『村医者』は明らかに最も意識的に構成された作品と云える。それは、例えば『判決』に対しカフカ自ら《自分が川の中を前進するように、この物語が展開したときのものすごい緊張と喜び》と云っている言葉と冒頭で挙げた『村医者』に対する彼の言葉を比較してみれば、前者はカフカが描こうとした内容（父子の葛藤を前面に押し出し、その背景に現実の作家的存在と市民的存在の相剋を描写する）がその内容を描写するに全く適した、彼が切望した形式、技法をもってして一気呵成に《一夜の亡霊》の如く無意識的に描き出すことに成功したことを証明し、その感動の表現と見做せよう。それに反して、『村医者』に対する言葉は、彼が自分の描く世界を《純粋なもの、真実なもの、不変的なもの》へ高めようとする意図が窺えるのだから。この作品が意識的に構成されているということは、D. Cohn が論ずる時制の問題からも推測出来る。『村医者』の内容は、明らかに《雪の荒野をさまよい》ながら、自分の陥った窮境を回想している。この結末では短い現在時制が用いられており、荒野における体験の現在進行形の瞬間を描写している。そして、その時点から過去へ視線が投じられているのであって、災難或は窮境へ通じた過った行動が、即ち回想が描写されており、そのために過去時制が用いられている。つまり、冒頭の《途方に暮れていた》から始まって過去時制が使われている。しかし、それは僅かで、馬丁が女中を抱擁する場面から、不承不承の出発、患者の家への到着、患者との会話、そして患者に名誉の言葉を与えるまで、ほとんど現在時制へ交替している。だが、患者が静かになり、村医者が自分の救いを考え、脱出し、雪の荒野を老人のように行くとき、再び過去時制に戻っている。では、この途中に入った、この作品の主要部を形成する部分で、過去への回想で本来なら当然過去時制で統一すべきであるにも拘らず、なぜ現在時制を用いたのか？

それは、この現在時制により、話と体験の時間的隔りが消去され、主人公の当惑、動揺、不安等の心理描写が直接的に表出出来るからである。それは、単なる回顧を表わす過去時制では、これ程直接的に表現出来ない。従って、この意味で、この現在時制は過去を表わす歴史的現在ではなく、その時点と場面における話し手の現在の瞬間である。カフカは現在時制を単なる伝達目的のためばかりでなく、《話の時制》と《内面の独白》を表現するために用いる傾向がある。実際に、この主要な中心部でも、現在時制がこの二つの目的のために織り込まれている。例えば、特に後者の目的では、《誰がそれを低い声でプッと吹き出さずに見つめられようか?》《あわれな少年よ、君は助からない》《…君の大きな傷を見つけた、君は脇腹のこの花のために滅びるのだ》《この土地の人々はこうなんだ…それ以上の何が望めよう、女中を奪われた年老いた村医者が》等。この現在時制の後に過去時制が再び用いられ、冒頭の過去時制と枠構造を形成することにより、即ち過去、現在、過去時制と構成されることにより、この中心部の現在時制が実際は過去の意味を想定していることを意識付けさせる。しかし、この内で内面の独白として用いられる現在時制は、話し手の過去ではなく、真に現在の瞬間に関係していることにより、機能が異なる。そして現在時制による短い結語は、過去のその一歩踏み外した状況が結局抜き差しならない動きのない永久に逃れられないものであり、その窮境内の心理上の葛藤の瞬間を強調する。このように『村医者』は過去の状況内に話と体験の時間的隔りを消去し話し手の自然な状況と内面の独白を成し遂げるために現在時制を投入し文体上の工夫を試みたと思われる。この一人称物語で、過去の事件にも拘らず、現在時制へ交替させ表現するのは、『城』において一人称から《K.》という三人称へ交換させた事実と同一の意味をもつ。即ち一人称物語で現在時制を用いるのは、例の話と体験の時間的隔りを消去し事件が未知数のまま今開かれるように描写するためか、話し手が現在陥っているその瞬間における心理状態を描写しようとするためであり、同一人称で過去時制を用いたら、関連場面が必然的にその過去を思い出している話し手の視点から見られ、過去の中で現われて、同じ効果は得られなくなる。しかし三人称の過去時制の場合は、描写世界を主人公の視点に完全に制限することにより、その世界は彼の思考と知覚を通して見られ、そのことにより、その場面と時間は同時に読者自身のものともなり、話の過去時制はその過去の意味を失うからである。従って、この作品は時制構造においてカフカの意識的な工夫が見られる。

既に述べたように、この物語は、いや総じてカフカの世界はと云うべきだろうが、多元多層的な象徴によって構成され、全ての形象が独自の意味を有している。また、例えば、《ローザ》《豚小屋》《馬丁》《少年》《傷》等に象徴させることによって描写する方法は、カフカが、比喩化することによって、現実における個人的体験や問題を超越した普遍化した世界を求めようとする傾向のものであり、この物語方法は伝統的な物語に見られるような解釈の手掛かりを奪い取る彼の隠蔽的な描写手段の上に立つものである。その世界を描き出すために、カフカは種々の要素を意識的に取り入れるが、自分の表現に合致する本質的なものだけを残し、余分な贅肉的なものは一切削除される。それ故に彼の世界は簡潔で直線的な印象を与え、それと同時に捕え処のない深みをも有することになる。

『或る戦いの手記』を初めとする種々の草稿において、カフカが色々な部分を抹消したり、同じ部分



を何度も書き直している事実も、ひとつには彼が描き出す世界を個人的なものからより普遍的なものへと追求するための証拠として挙げられよう。カフカの象徴のもつ特徴を P. K. Kurz は次のように説明する：＜カフカの形象から云えば、その異化はともかく、古典的象徴以下でもあり以上でもある。以下であるというのは、形象の次元が純粋に存しないからである、即ち秩序付けとして、またまずは広く明確な、物語事件を予め整然とさせる秩序として存しないからである。以上であるというのは、形象の指示的性格がより強く、またその表現上の性格、その象徴性、その隠喩化が最初から意図されているからである。カフカの形象は、より内面化されており、より精神化されており、しかしより意図的でもあって、実存的で、既に出発点において主観的、隠喩的で、屈折し、不協和音的で、グロテスクである。＞。また彼の行なういくつかの形象分析もカフカの世界の深淵さと広がり把握する上で、同時に彼が描写する際包括的な細心の注意を払っていることを見る上でも、列挙する必要がある。例えば、《冬》は単に四季の中のひとつの季節としてではなく、もう既に安全でない、曝された空間を思い浮ばせ、《凍てつく冬》は物語の経過の中で必然的に《果てしない冬》に、《吹雪》は《雪の荒野》になる。《夜》は《月光》の予知的な雰囲気の中に置かれる。裸は最初から、また服を脱がせる過程を通してその実存的な意味を意図している。即ち無力にすること、露になること、真の自己へ投げ出された（少年）、また投げ返えされた（村医者）人間の状況、孤独な貧窮、死出の支度。少年が寝ている、そして医者が寝かされる《ベッド》は、夢と目覚めの場所、女性を通して一体となったり、気晴らししたりする場所、変身の、また究極の真理の暴露の場所、その上『流刑地にて』に見られるように裁きの場所でもある。イロニーをもって村医者はローザの代わりに臨終の人とベッドを共にする。彼が決して自分の《ベッド》に戻らないことによって、彼は象徴的に究極の真理を体験する、即ちこの世にはもはや私の場所はない、と。

上述のように、形象のひとつひとつは我々の通例の経験的意味において周知の全く正常なものであるが、それらの形象の組み合わせから形成される世界は全く異常と化した印象を与え、物語は我々の日常の論理と因果性を遮断してしまう。しかし、その形象こそはカフカの内面の深層に横たわる問題に係るものであり、それを象徴化するための素材であることは疑い得ない。この象徴にしても『或る戦いの手記』における自己の内面を見つめる闘いから出発して、その闘い《生きることは不可能であるということの証明》は、次第に父子の葛藤、結婚問題、さらにそれに結び付く作家的存在と市民的存在との葛藤という明確な形へと進展していき、『判決』において見事な結実を示すわけだが、その闘いこそがカフカの世界の根底を形成するものであろう。従って、ここでこの『村医者』を現実におけるカフカの自己との闘争の象徴として分析してみたい。

まず、この物語を当時カフカが置かれていた伝記上の状況に照らして考察すると、彼がフェリーツェとの二度目の婚約を考えていた時期を示す。そのことにより、『判決』で描かれている作家的存在と市民的存在との対決が再び取り上げられていることが推測出来る。しかし、『判決』に見られる明確に把握出来る形ではなく、既述の、カフカが実際関心を抱いていた二つの Hasidic 物語からのモチーフの類似性と『夢判断』における理論の描写技法に関する応用が反映されていると推測出来るよう

に、意識的な工夫を投入して、その象徴性を増して描き出されている、しかもその作家的存在は決して市民的存在と相容れるものではないと内心においてよりはっきりと認識していることを窺わせる。村医者自身の内面に二律背反的な存在としての二分した自己を認めるのは容易であろう。今まで自分の職業に忠実に過労と云える程献身し義務を果たしてきた（少なくとも彼自身の視点からそう述べられている）村医者の秩序立った内面に《夜間用呼鈴》によって何か変化が起った。それまでのその平穏な生活を理性的と称するなら、《ローザ》と《馬》と《馬丁》に象徴されたものは感情的と呼べ、次第に後者が前者を支配していく。ローザの言葉《実際自分の家にどんな物が貯えてあるのか判らないものですね》は彼自身気付かなかった内面における潜在的な感情面が指摘され、彼の生活において再び大きな割合を占めるようになることの予言でもあるかのようなものである。さらに、この言葉は、当時再び婚約を考えていたことを考え合わせれば、カフカが、またもや台頭してくる自分の内面における感情に一種驚嘆の念を含めて、自ら自分に云って聞かせたようにも受け取れる。それまで余りにも理性的であった或はそう努めてきたが故に見過ごされてきたその感情に支配された衝動は、今やローザを襲う馬丁の姿に具現されている。また、注意すべきことには、ローザをその名で最初に呼ぶのは、今まで一緒に生活してきた主人である村医者ではなく、豚小屋から現われたばかりの一面識もない、従って本来なら彼女の名前など知る由もないはずの馬丁である。それは潜在的な両者の連関を暗示しているようだ。以上からも判るように、フェリーツェに対するカフカの関係が微妙に描き出されると云えよう。しかし、この感情による衝動に捕えられた村医者はまず理性的に振舞おうとする。とにかく急を要する患者のところへ行かねばならない。この患者に象徴されるものは別の自我であり、村医者の以前の平穏な理性的な生活と同じ次元の上に立つものである。彼の苦しむ姿はカフカが作家として生きることの苦悩に相応し、また彼のもつ無邪気な一面は作家として何ものにも汚されることのない存在の象徴と見做せる。作家的存在を象徴する少年の患者を診察しながらも最初はローザのことを考える、馬にも促されているかのように家へ戻ることを考える。ここにおいて、前述のようにローザや馬が感情に支配された自我を象徴するとすれば、それはフェリーツェとの生活を想定した市民的存在に通ずるものであり、カフカ自身の内面における両存在の葛藤を再び読み取ることが出来る。この少年の患者に象徴されるものが作家的存在であると解れば、物語の冒頭で村医者が患者のもとへ一刻も早く行かねばならぬのに、準備万端整っているにも拘らず、そこへ行く手立てがなく困惑し絶望的になっている状況も察することが出来よう。つまり、いかにしたら真の作家的存在へ達せられるのか。そして、その苦悩の中で感情に生きる市民的存在がふと頭をもたげる、それはその絶望の真只中で長い間ほったらかしにしてあった豚小屋を偶然蹴飛ばすことによって現われる馬と馬丁に象徴される。この後者の存在が次第に優勢となり、今や前者の存在と同じ権力を持って真っ向から対立する。ローザの存在を認めた後で村医者が不承不承に患者のもとへ向かう姿にもその兆候を見い出せよう。それは、忘れていた（少なくともそう努めていた）感情に生きる市民的存在への思いの目覚めと、それとは相容れない、自分が作家であるということ、そのための宿命とそこにしか生きる道を見い出せないと思えようとする二つの存在の姿だ。このように見てゆけば、再度の婚約を考えるに際し

て、この問題が再びカフカの内面を大きく占有するようになったのではないかと推測し、この作品にその反映を読み取ろうとするこの論文の立場が決定的外れではないことが判るであろう。例の少年の患者が作家的存在を象徴しているが故に、この子供に対する一家の悲嘆も実際にカフカから見た自分の家族の現実状況として理解が出来よう。しかも致命的な傷をもつ少年に象徴される立場からすれば、カフカが唯一可能としたその存在は職業、結婚生活、家族に対する義務を行なうことによって基礎付けられる市民的存在とは決して一致するものではない。このディレンマ的立場は女中ローザと少年のもつ傷が《バラ色で (rosa)》と形容されることにより、両者が互いに意識的な連関を持って描写されているながらも、その二つを同時に自分のものとするの出来ない村医者の姿に最も良く表現されている。即ちローザを救おうとすれば、その傷をもつ少年を診察し救うという（もちろん救えはしなかったが）医者としての義務を遂行することが出来なかったのであるから。では、この不治の《傷》に象徴されるものは何か。それは、作家として持って生まれた宿命であり、同時に避けることの出来ぬ苦悩でもある。初めは敢えて見つけようとはしない村医者の仕種は、感情的衝動を象徴する《馬》のいななきがより高い次元—höhern Orts angeordnet—で制されることにより、その傷を発見しようと変わる。そして、発見される、それは結局作家として生きることが宿命であると以前にも増して明確に認識したかのようなのである。その傷は既に手の施しようもなく化膿しており、それがために少年は死なねばならない、それはそれ程までに作家的存在に宿命的に落ち込んでいる者はその苦悩を回避することが全く不可能であるということの確認であり、またそれこそが作家カフカの持って生まれた宿命なのである。この意味は、患者の云う言葉《…僕は素晴らしい傷を持ってこの世に生まれてきた。これが僕の身仕度の全てでした》に明確に表現されている。そして、この誕生の傷がまた死への傷でもあるのだ。この言葉の前後の他の村医者と患者との間で交わされる会話も作家としての宿命が意図的に描写されていると解釈出来る、例えば、《…あなたに対する僕の信頼はごく僅かなものです。あなただっただけでどこかで振り落とされたにすぎないじゃないですか、自分の足で来たんじゃない。助ける代わりに僕の臨終の床をせばめている。…》は作家として普通の人生行路を歩むことは出来ず、また安らぎの中で死ぬことも不可能であると自ら認め、《君の誤りはだな、展望を持たないということなんだ。…君の傷は大して悪いものじゃない。…多くの人が森でその脇腹を差し出し…》はそうした宿命における苦悩でさえ、もっと全体的に見れば、さして悪いものではないと自分に云い聞かせるかのような。従って、《先生、死なせて下さい》と最初に云った患者が《助けてくれますか》と傷の中にいる生き物によって全く目が眩まされすすり泣いてささやく真意も推し量ることが出来る。自分の宿命、逃れられない真の姿を垣間見てしまった者は、もはや何の抵抗もせず、着物を脱がされるに身を任す、その上、何やら落ち着いて優越さを感じる。だが、その垣間見た者は、今や、ローザを救うためではなく、即ち安楽な感情に生きる市民的生活を取り戻すためではなく、自分自身、即ち作家としての生活を救うために患者の家を飛び出すが、もうそれさえも不可能となり、《裸でこの悲惨極まりない時代の寒気に晒され、この世の馬車とこの世のものではない馬と共に》、それは現実の自分の存在をどうすることも出来ず、押し流されるに身を任せざるを得ないように、《年老

いた私は馳けずり回る」のである。この最後に表現されているように、結果はもはや以前の状態にも戻ることの出来ない中間的浮遊的存在となる。それは、死ぬことも出来ぬ獣師グラックスと同じく、死のない生の状態と云って良いのかもしれない。村医者は夜間用呼鈴の音に従ったあの瞬間から自分の存在が不安定となり、自己の存在の確証を失い、安住することが不可能となった、いやそればかりではなく、自分の所有していたものまでも失い、逆に回避出来ぬ自分の宿命を確証させられたかのようである。そして、彼の行動は結局破滅へと通じ、『或る戦いの手記』が語る言葉、カフカの基本的な体験としての「生きることは不可能である」ということの証明」を再び浮き出させる。

以上述べてきたように、「傷」はそこから引き出せる持って生まれた宿命並びにそこにおける避けることの出来ぬ苦悩の姿を象徴する他に、冒頭近くで説明したが、罪と罰の象徴をも有している。その上、カフカはこの物語を書き上げた同年の1917年の9月に自分の結核を知るわけで、例の二つの存在の葛藤、職業や結婚問題等を含めた諸々の現実からの自己を解放する意味においては、それは「ひとつの鎮痛」であり、「呼び寄せたるもの」でもあり、そのことが既にこの「傷」の中に先取りされている。また、9月15日の日記には「肺の傷は単なる象徴に過ぎない」と書かれており、この記述から判るように、彼自身この傷に個人的体験全てが集約されていると見做そうとしている。これに関して P. K. Kurz は次のように論ずる；「カフカは彼自身の傷を精神身体医学的に、全存在を包括して、また不可避的に、個人的に理解した。その傷の中に「父親の呪い」と自分の一家に対する全くの不調和（誕生の不調和）が潜んでいた、フェリーツェと市民的な職業に対する不調和が潜んでいた、「一般的な死因」が、半ば追いやった罪の意識と無罪の意識が、逃げ道のないことが、この世の中でうまくやってゆけないことが、自分の人間的存在全体の「自己弁護」への問いが潜んでいた…。」。

この論文では、冒頭で述べたように、カフカの現実における基本的な体験としての例の二つの存在の葛藤が底辺を形成していることを前提として象徴の分析を行ってきたわけだが、それはもう『判決』におけるように明確に洞察出来る形で描き出されてはいない。即ち、既に説明したように、カフカがより普遍的な世界を求めようと種々の要素や意識的な工夫を投入したため、後ほどではないにせよ、その洞察を許さない程この作品の世界は複雑になり象徴の密度も凝縮されている。従って、H. Kraft のようにこの作品に社会批判を見たり、P. K. Kurz のように村医者の内面に起こる変化を認めながらも彼の社会的孤立並びに宿命的存在を述べたりする解釈が生ずる。さらにまた、J. Müller のようにこの作品が第一次世界大戦の最も血なまぐさい局面のときに書かれたことを根拠にして、医者が救いの手を差し伸べようとするのを妨げるのは、一時代一般ではなく、悲惨極まりない時代、カフカの時代であるとし、彼の主観的な時代体験の描写と見做す、それ故に医者の姿に欺瞞よりもポジティブな性格を見ようとし、残忍、不条理な時代では医者の助力を求める呼び出しも偽りの音となり、元には戻れぬさまよいへと通ずると解釈する立場も生ずる。実際に、物語の冒頭での村医者に村人の誰一人として馬を借そうとはしない様子、彼自身の家でも女中との真の接触を長い間欠いていた状況、さらには彼自身の言葉「…処方箋を書くことは容易いが、しかしその他の点でこの人々と理解し合うのは難しい…」等の描写から村医者が社会的に孤立して生活していたことを見て取れるし、ま

た自分の成し遂げたものをも奪い取り、自分の意志を離れて進行し、いかなる対処も不可能とする、そして逃げ道もなく定められた、逆行を許すことはしないその流れに人間の関与の及ばない宿命を読み取ることも出来るかもしれない。また事実、ほとんどの論文はこの作品の世界が描く対象をそうした社会状況において、カフカ個人に限らず、むしろ誰れしもが体験したような世界或はそこにおける宿命の姿の描写という立場をとって論じており、この論文で扱ったように、もっとカフカの内面に向く個人的な体験の闘いの反映として見ようとはしていない。しかし、この作品に限らず、カフカの他の作品の世界を考えてみても、やはり根底において論すべきは、一般的など云うよりも彼自身の個人的な体験であって、今まで論考してきたことから判るように、彼個人の問題として生活において立ち足る例の二つの存在の葛藤が潜んでいることが洞察出来たのである。その葛藤を極めて敏感に繊細に捕え、また決して一瞬たりともそれが脳裏から消えることがなかったがために、そして彼自身その相剋の狭間で家庭において現実孤立していたがために、村医者孤立した状況の描写にも反映されているのだが、しかし、そうした描写に固執する余り、カフカ個人に係るよりも、むしろこの社会における全般的な人間の孤立状況の描写や社会批判をこの作品に見ようとする、上述のような、解釈が生じてくるように思える。つまり、ここで注意しておきたいことは、当時の社会的な状況、背景が、カフカの描こうとする世界或は少なくとも描写された世界の大きな割合を占めるのだと考えるのではなく、例の二つの存在の相剋に起因するカフカ個人の孤立感、宿命感と云ったものと同じ次元の上に立つものであると解すべきではないかということである。それにも拘らず、カフカの個人的な体験を超越して、そうした時代背景の中で一般に誰れしもが自己の内面を凝視することにより認識する孤立と宿命とに対決させられているような世界を描写していると感じさせるこの作品の世界は、正にカフカの求めた客体化し普遍化した世界のもつひとつの面が成功していると云えよう。しかし、何と云おうとも、カフカが実生活において二つの存在の間で苦悩し、結局それを克服出来なかった事実は、正しく現実を制することの出来ない、この作品が描き出している世界である。そして、この二つの存在の狭間にいる姿は、さらに比喻性を増すことにより、結末におけるような、目的地に向かいながらそこには辿り着かず、ただその周りを切望しながら回る循環的な運動へと、又は、グラックスやK.の置かれているような中間的浮遊的存在へと象徴されてゆくようにも思える。それは、カフカ自身が自分の置かれていた状況を出来る限り極端に異化しようとする傾向から生じるものであろう。こうして創り出され客体化された世界は、もはやカフカの個人的な体験を明確な形で残さず、それを超越し、普遍化された世界となってゆく。それは、カフカが望む《世界を純粋なもの、真実なもの、不変的なものへ高める》ためのひとつの前提条件なのだ。だがしかし、それにも増して、《…素晴らしい傷を持ってこの世に生まれてきた。…》や《裸でこの悲惨極まりない時代の寒気に晒され、…》等の陳述は何やらカフカが自分自身に語る、いや云い聞かせる彼自身の宿命の独白であるかのようだ。

#### テ キ ス ト

*Eranz Kafka Sämtliche Erzählungen*, hrsg. von Paul Raabe, S. Fischer, \_\_\_\_\_.

### 主要参考文献

- Beicken, Peter U.: Franz Kafka Eine kritische Einführung in die Forschung, Athenaiion, 1974.
- Marson, Eric and Keith Leopold: Kafka, Freud and »Ein Landarzt«. *German Quarterly*, 1964, H. 2, S. 146—160.
- Guth, Hans P.: 'Symbol and Contextual Restraint. Kafka's »Country Doctor«.' *PMLA* 1965, H. 4, S. 427—431.
- Kurz, Paul Konrad: 'Verhängte Existenz. Franz Kafkas Erzählung »Ein Landarzt«.' P. K. Kurz' *Über moderne Literatur*, Frankfurt/M, 1967, S. 177—202.
- Goldstein, Bluma: Franz Kafka's »Ein Landarzt«, A Study in Failure, *Dvjs*, 1968, S. 745—759.
- Müller, Joachim: 'Erwägungen an dem Kafka-Text: »Ein Landarzt«.' *Orbis Litterarum*, 1968, S. 35—54.
- Cohn, Dorrit: 'Kafka's eternal present: Narrative tense in »Ein Landarzt« and other first-person stories,' *PMLA* 1968, S. 144—150.
- Fickert, Kurt: 'Fatal knowledge: Kafka's »Ein Landarzt«, ' *Monatshefte*, 1974, S. 381—386
- Birch, Joan: 'What happens to the doctor in Kafka's »Ein Landarzt«?', *Modern Austrian Literature*, 1976, S. 13—25.